

記念誌目次

里山讃歌音楽祭へようこそ

皆様、本日は年の瀬のお忙しい中、「里山讃歌音楽祭」にご来場いただき、ありがとうございます。

ここ小江戸川越の近隣には、人々が自然と共生し動植物や農作物を育てて来た里山が、今も豊かな姿で残っています。この里山をこからの未来に伝え残し、そこで生命と心を大切に育む人材を育成すべく、このたび、埼玉県立川越総合高等学校と尚美学園大学は高大の教育連携を図ることとなりました。

本音楽祭は、その取り組みの一つの成果であり、高校生と大学生が共に練習に励み創り上げたハーモニーをぜひお聴きいただければ幸いです。

私ども主催校では、本音楽祭を契機に、音楽をはじめとした芸術全般に亘る里山の祭典に発展させていきたいと願っており、本日をその大切な第一歩と考えております。

本日はまた、「もしもピアノが弾けたなら」やNHK連続テレビ小説「おしん」のテーマ音楽等の作曲家として著名な本学客員教授である坂田晃一が、里山を讃えて新たに作曲した合唱曲「宮沢賢治の風景〜雲の信号〜」が高校生と大学生の手によって初演されます。ぜひ、本年の締め括りを、若い世代の瑞々しい演奏で心ゆくまでお楽しみ下さい。

- 里山讃歌音楽祭へようこそ 松田 義幸 3
- 里山讃歌音楽祭に寄せて 川合 善明 4
竹本 政弘
松田 義幸
- 応援メッセージ 大橋 幸男 5
森田 恒夫
- プログラム／出演者紹介 6
- 楽曲解説 田村 和紀夫 8
坂田 晃一
- 21世紀の農・食・祭〜いのちを思う〜 中村 桂子 10
- 里山ルネサンスの担い手の皆さんへ 古在 豊樹 13
- 美の原点としての景観〜日本の童謡に謳われる里山の風景〜 ... 千賀 裕太郎 14
- 農業高校と伝統文化 花野 耕一 16
- 里山讃歌音楽祭に向けて 酒井 一郎 17
- 音楽を精魂の糧に 皆川 弘至 18
- 里山芸術祭への夢 乳井 瑞代 20
- 里山讃歌音楽祭に参加して 22
- 出演者一覧 24

応援メッセージ

若者よ、未来を唱え

全国高等学校農場協会会長 **大橋 幸男**

里山讃歌音楽祭おめでとうございます。練習に励んできた川越総合高校の皆さん、尚美学園大学の皆さん、ご指導下さった坂田先生、河合先生をはじめ諸先生方、改めてお祝いを申し上げます。今、私たち農業教員の願いは高校生たちが主人公となって、自分の思いを精一杯表現すること。皆それぞれの思いを持って高校生活を送っています。楽しいこともあれば嫌なこともある、苦手の授業も、楽しい農場実習も。そうした日常がやがて未来に向かって本当に輝くものになるよう、思う存分歌い、演奏してほしいと想います。

かつて宮澤賢治がねがったことは農村の繁栄と農民の幸せに外なりませんでした。そのために農学校の先生の時も、羅須地人協会の設立後も、芸術を農民が心豊かに生きるための糧として位置づけていました。それが詩であり小説であり歌でありました。

賢治は「農民芸術概論綱要」のなかで「お朋だちよ いっしょに正しい力を併せ われらのすべての田園とわれらのすべての生活を一つの巨きな第四次元の芸術に創りあげようではないか」と呼びかけています。「農」という人間の根源的営みから生まれた今回のコンサートは、まさに、この賢治の想いにかなったものではないでしょうか。成功をお祈り申し上げます。

Profile
現在千葉県立流山高校校長とともに農業教員の全国組織である全国高等学校農場協会の会長をつとめる。35年間農業教育一筋。特にシクラメンなどの草花栽培に取り組んできた。我々農業教育に携わるものは、農業者の立場に立って日本農業の発展に貢献して初めてその任を全うできる」が信条。

里山讃歌音楽祭に寄せて

全国高等学校農場協会事務局次長
NPO法人武蔵野の未来を創る会代表理事 **森田 恒夫**

里山讃歌音楽祭の開催を心よりお祝い申し上げます。

ベートーヴェンが難聴に絶望しハイリゲンシュタットの遺書を書いた一八〇二年以降、彼の創作意欲と生きる喜びを取り戻したのは他ならぬハイリゲンシュタットの田園風景であったといわれます。ベートーヴェンの散歩道と呼ばれる小径に沿って小川が流れ、森からは風の音、鳥の鳴き声が聴こえます。おそらく農作業の様子も垣間見ることができたことでしょう。苦悩の中で作曲された交響曲第5番で自身の運命と自然への対峙を経て安らかな自然への喜びと感謝の「田園(Pastoral)交響曲」が創られたのは、まさしく緑豊かな田園・里山の力であったと言えましょう。因みに、ウィーン郊外にアルカディアと名の付いたカフェが多いのも偶然だとは思えません。

今、人々は、20世紀の機械文明から、もう一度緑と命に溢れた自然と共生する大切さに気づき始めています。かつて原始と人が寄り添い芸術が誕生した里山田園こそ現代人への道標ではないでしょうか。

農業と芸術を共に体感した両校の若者達によって紡がれる音の世界を心から期待しています。

Profile
川越生まれ。埼玉県立川越高校卒業。千葉大学大学院修了。県立与野農工高校、川越総合高校勤務。元全国高等学校農場協会会長。現在は、全国高等学校農場協会事務局次長、NPO法人武蔵野の未来を創る会代表理事を務め、三富地区で営まれる循環型農業の素晴らしさを伝え、広く人々に里山の意義を伝える活動をしている。音楽への造詣も深く、バルトークや東欧の音楽が好みである。

里山讃歌音楽祭に寄せて

ごあいさつ



川越市長

川合 善明

このたび、尚美学園大学と川越総合高校の主催により「里山讃歌音楽祭」が盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げます。

本年、市制施行90周年を迎えた本市は、県南西部地域の産業、文化の中心都市として発展を続けながらも、郊外には緑豊かな自然が多く残されております。

このような環境にいち早く着目され、次世代に伝えるべく、日頃から高校、大学の交流を通して若者と共にご尽力いただいております。両校に深く感謝を申し上げます。

今後とも両校のご活躍をお祈り申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。



埼玉県立川越総合高等学校 校長 竹本 政弘

今年度から尚美学園大学と川越総合高等学校の高大連携事業を行っております。

その一環として、10月28日(日)には本校を会場として、思想劇場「里山芸術と農業の未来」を開催させていただきます。

両校の連携の取組みについては、農業高校支援機構が提唱する3つのF(農(Farm)・食(Food)・祭(Festa))を基盤として、里山イニシヤティブル越教育モデルとして全国に発信する機会となりました。

今後、共に学びながら川越の地から「農のある音楽活動」として幅広く展開されることを願っております。



尚美学園大学 学長
学校法人 尚美学園 理事長
松田 義幸

文人、國木田独歩は、「武蔵野の林の美しさ、それは詩趣の味わいである。その武蔵野の面影はいまわずかに人間郡に残っている」と記しています。この刷り込みが今の人たちにもあるからでしょう。狭山の里山がジブリ作品『トトロの森』のイメージ舞台になりました。

このたびの両校の里山讃歌音楽祭が、3・11以降の食の安全・安心の「食・農」教育に加えて、「祭」を加えた、新しい晴耕雨読のライフスタイルの魅力づくりの一助になることを願っております。

特に、これからは、日本が世界に誇る里山を、次の世代を担う、「小・中・高」校の皆さんに引き継いでもらい、里山の理念と方法を世界に普及させていきたいと思っております。



ソプラノ(第九)
丸山 恵美子

東京藝術大学卒業、同大学院修了。ロニーゴをはじめ、ヴェルディ、イタリア国営放送、トレヴィーゾ、トティ・ダル・モンテ等、国際コンクールで数多く優勝。

スケールの大きな国際的プリマとして、ウイーンを始め、ベルリン、デュッセルドルフ、フランクフルト、ケルン、ミュンヘン、ヴェローナ、ルーアン、台北歌劇場、エクサン・プロヴァンス音楽祭等で活躍。「アイーダ」「トロヴァトーレ」「トウランドット」

等で絶賛、巨匠カラヤンにも認められる。

帰国後も二期会の「運命の力」を始め、多くのオペラに出演。また後進の指導にも情熱を注ぎ、多くの優秀な歌手を育成している。現在、尚美学園大学教授。



バリトン(第九)
久保 和範

東京藝術大学、同大学院修士課程独唱科修了。文化庁オペラ研修所第9期生修了。平成7年度文化庁芸術家在外研修員としてニューヨーク・ハーレム・オヴ・ジ・アーツに留学し、声楽とポピュラーヴォーカルを専攻。読売新人演奏会出演。第1回ヴォーチェ・プリランテ・オペラコンクール第1位。第6回奏楽堂日本歌曲コンクール第1位等受賞多数。

オペラ「コシファントゥッテ」のグリエルモでオペラデビュー以来

数多くのオペラに主要な役で出演。特に新国立劇場、東京二期会オペラ劇場においては数々の公演に出演。また、NHK交響楽団、読売日本交響楽団など主要なオーケストラにソリストとして客演。現在、尚美学園大学准教授。二期会会員。



アルト(第九)
奥野 恵子

尚美学園大学声楽コースを卒業。東京ミュージック&メディアアーツ尚美ディプロマコースを修了。二期会オペラ研修所第52期マスタークラスを修了。修了時に優秀賞を受賞。大学在学中、学内音楽コンクール第一位を受賞、平成22年度友愛ドイツ歌曲コンクール入選。多摩フレッシュ音楽コンサート2011において優秀賞を受賞。原田泉、山崎岩男、中村健、太田朋子の各氏に師事。

これまでに、ヴィヴァルディ「グローリア」、バッハ「マタイ受難曲」、ヘンデル「メサイア」、モーツァルト「荘厳ミサハ長調」「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」等のアルトソロを務める。現在、洗足学園音楽大学演奏補助要員、(株)カルチャー音楽講師。二期会会員。



テノール(第九)
朝倉 佑太

尚美学園大学音楽表現学科声楽コース卒。同大学院音楽表現研究科声楽科卒。現在、東京二期会本科に在籍。大学在学中は毎年優秀者演奏会に出演。声楽を鈴木寛一氏に師事。

現在までに、オペラ「コジファントゥッテ」フェランド役、「フィガロの結婚」クルツィオ役、また「エルガーの戴冠式唱歌」テノールソリストをつとめた。鈴木寛一氏のもと毎年行われる震災チャリティーコンサートに出演。

尚美学園大学強化指定サークル「匠」に在籍し、ソロ・デュオでの活動、「匠」の顧問である山崎岩男氏の指揮のもと合唱でのコンサートも行っており、毎回好評を博している。新進気鋭の若手テノールである。

里山讃歌音楽祭

プログラム

1

ベートーヴェン作曲
「交響曲第6番 へ長調『田園』Op. 68」
指揮：河合 尚市

2

坂田 晃一作曲
合唱曲「宮沢賢治の風景～雲の信号～」
指揮：坂田 晃一

3

ベートーヴェン作曲
「交響曲第9番 二短調『合唱付き』Op. 125」より第4楽章
指揮：河合 尚市



作曲・指揮
坂田 晃一

Profile

東京生まれ。早稲田大学高等学院、東京芸術大学(チェロ専攻)を経て(中退)、作曲を山本直純氏に師事、商業音楽の作曲について徹底的な訓練を受ける。1965年よりテレビドラマ、映画、レコード、舞台、CM等、幅広い作曲活動を展開。編曲家としても、由紀さおり・安田祥子姉妹のCD・コンサートの編曲にその手腕を発揮している。現在、尚美学園大学芸術情報学部音楽表現学科客員教授、尚美総合芸術センター副センター長。

主な作品主題歌(CD:「もしもピアノが弾けたなら」(西田敏行)、「さよならをするために」(ピリーバンバン)挿入歌(CD:「鳥の歌」(杉田かおる)/NHK大河ドラマ:「おんな太閤記」、「いのち」、「春日局」、NHKドラマ:「銀河テレビ小説「わらの女」他多数、朝のテレビ小説「おしん」、「雲のじゅうたん」、「チョっちゃん」/民放テレビドラマ:「3丁目4番地」、「池中玄太80キロ」、「家政婦は見た!」、アニメーション:「母をたずねて3千里」、「南の島のルーシー」/映画:ジブリ「コクリコ坂から」主題歌、東映「日本一短い母への手紙」、「佐賀のがばいばあちゃん」、他多数。コンサートプロデュース:「リゾナーレ高原音楽祭」他。



指揮
河合 尚市

Profile

東京芸術大学卒業。これまでに劇団四季ミュージカル「オペラ座の怪人」(日本初演指揮)、東京混声合唱団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、ニューフィルハーモニーオーケストラ千葉、東京フィルハーモニー交響楽団、東京シティーフィルハーモニック管弦楽団、東京ニューシティー管弦楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、セントラル愛知交響楽団、日本センチュリー交響楽団、大阪交響楽団、ザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団、広島交響楽団、九州交響楽団、中国電影楽団、上海放送交響楽団、東京吹奏楽団、新ヴィヴァルディ合奏団、日本音楽集団の各公演を指揮。

現在、(財)国際親善協会ジャパンウィーク音楽監督、尚美学園大学芸術情報学部音楽表現学科准教授及び尚美学園大学大学院芸術情報研究科音楽表現専攻准教授を務める。ピアノを有賀喜美子、打楽器を有賀誠門、作曲を細矢禎、指揮を山田一雄、村方千之、の各氏に師事。日本屈指のバレエ指揮者としてこれまでに数多くのバレエ公演を指揮する。

ベートーヴェン 交響曲第9番「歓喜に寄せて」訳詞

おお友よ、このような音ではない！
我々はもっと心地よい
もっと歓喜に満ち溢れる歌を歌おうではないか
(ベートーヴェン作詞)

歓喜よ、神々の麗しき靈感よ
天上の楽園の乙女よ
我々は火のように酔いしれて
崇高な汝(歓喜)の聖所に入る

汝が魔力は再び結び合わせる
時流が強く切り離れたものを
すべての人々は兄弟となる
(シラーの原詩:時流の刀が切り離れたものを
貧しき者らは王侯の兄弟となる)

汝の柔らかな翼が留まる所で
ひとりの友の友となるという
大きな成功を勝ち取った者
心優しき妻を得た者は
彼の歓声に声を合わせよ

そうだ、地上にただ一人だけでも
心を分かち合う魂があると云える者も歓呼せよ
そしてそれがどうしてもできなかった者は
この輪から泣く泣く立ち去るがよい

すべての被造物は
創造主の乳房から歓喜を飲み、
すべての善人とすべての悪人は
創造主の薔薇の踏み跡をたどる

口づけと葡萄酒と死の試練を受けた友を
創造主は我々に与えた
快楽は虫けらのような弱い人間にも与えられ
智天使ケルビムは神の御前に立つ

神の計画により
太陽が喜ばしく天空を駆け巡るように
兄弟たちよ、自らの道を進め
英雄のように喜ばしく勝利を目指せ

抱き合おう、諸人(もろびと)よ！
この口づけを全世界に！
兄弟よ、この星空の上に
父なる神が住んでおられるに違いない

諸人よ、ひざまついたか
世界よ、創造主を予感するか
星空の彼方に神を求めよ
星々の上に、神は必ず住みたもう

ベートーヴェン 交響曲第6番へ長調《田園》作品68 解説 田村 和紀夫

ベートーヴェン(1770-1827)は、三十歳をすぎた頃から、だんだん耳が聞こえにくくなりました。これは作曲家にとって致命的であり、療養していたウィーン郊外のハイリゲンシュタットで、遺書を書いたほどでした。しかしベートーヴェンは不屈の精神でこの苦悩を乗り越え、耳に障害があっても、偉大な音楽が作曲できることを証明して見せたのです。彼の体験は「苦悩を突きぬけて歓喜へ」という表現で、交響曲第5番短調《運命》(1808)に刻みつけられています。その時、平行して作曲されたのが、交響曲第6番《田園》でした。

交響曲は通常4つの楽章から成りますが、《田園》交響曲の場合、5つに拡大され、それぞれの楽章にタイトルが付くという新しい試みが打ち出されています。第1楽章は「田舎に着いた時の晴れやかな気分」と題されています。速すぎない快速調の、のびやかでくろろい音楽で、最初の部分が後半で再現される「ソナタ形式」で書かれています。

第2楽章は「小川のほとりの情景」です。テンポの遅い楽章で、弦楽器は小川のせせらぎを描き、曲の最後にはうぐいす(フルート)やうずら(オーボエ)、それにカウ(クラリネット)の鳴き声が響いてきます。あのハイリゲンシ

ユッタツの木洩れ日の中を散策するベートーヴェンの姿が目につくでしょう。第3楽章は「農民たちの楽しい集い」ですが、やがて雲行きが怪しくなり、雨が降り出し、稲妻が光り、暴風雨が吹き荒れます。第4楽章「雷雨、嵐」の到来です。そして雷雲が去ると、雲間から陽光が射し込み、第5楽章の「牧人の歌」が響いてきます。「嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」が壮大に歌い上げられるのです(以上の第3楽章から第5楽章までは続けて演奏されます)。

情景を音で描く作曲家としての腕前の冴えにもかわらず、ベートーヴェンは《田園》交響曲は「絵画的な描写ではなく、感情の表現」だといいました。彼が表現したかったのは、耳の病気に悩まされた時も慰めてくれた、自然への感謝の念だったのかも知れません。

Profile

1952年、石川県七尾市生まれ。尚美学園大学芸術情報学部音楽表現学科教授。専攻は音楽学で、「西洋音楽史」と「音楽美学」等の科目を担当。著書には『ビートルズ音楽論』(東京書籍)、『名曲に何を聴くか』『新名曲が語る音楽史』(以上、音楽之友社)、『クラシック 名曲名演論』(アルファベータ社)、『交響曲入門』『音楽とは何か』(以上、講談社)、『図解クラシック音楽の世界』(新星出版社)等がある。

ベートーヴェン 交響曲第9番二短調《合唱付き》作品124 解説 田村 和紀夫

ベートーヴェンが最後の交響曲を書き上げたのは一八二四年、世を去る3年前でした。老匠匠の耳は完全に聞こえなくなっていました。彼の心は感動的な音楽を聴いていたのでした。それを表現するために、器楽の最高峰である交響曲に、ベートーヴェンは取って代わり、人声を取り入れました。こうして交響曲第9番は、器楽の抽象的な表現に対して、言葉によるいっそう明確なメッセージをもつことになりました。

全曲のハイライトである第4楽章では、まず冒頭の嵐のような導入の後、先立つ第1、第2、第3楽章の主題が引用されます。しかし低弦はそれに異議を唱えるかのようです。すると最後にあの「よるこびの歌」(歓喜の主題)の断片が木管に現れます。これこそ求められていたものであるかのように、音楽はそこで一段落し、それまで否定的な役割を演じていたチェロとコントラバスが「歓喜の主題」の全貌を歌い上げます。

音楽は急激に膨れあがり、バスの独唱になだれ込みます。「友よ、これらの音ではない」と歌われる時、これまでの楽器だけだった表現の真の意味が明らかとなるのです。「もつと心地よい、歓喜溢れる歌をうたおうではないか」。今や「歓喜の主題」こそが《第9》の到達点であることが告げられるのです。

バスの先導に合唱が応え、独唱陣も入り混じり、シラー(1791-1805)の

「歓喜に寄す」が謳い上げられます。歓喜こそは「天上の楽園の乙女」であり、歓喜において「すべての人々は兄弟になる」というのです。曲がいったん落ち着くと、行進曲風になり、今度はテノールが合唱を導きます。こうして「主題」は合唱による歓呼の渦の中で最高潮を迎えます。

しかしベートーヴェンはもうひとつの重要な主題を出しました。荘厳な儀式のような音楽となり、眼差しは天上に向かいます。「抱擁を受けよ、すべての人々よ。星の彼方に住むという創造主のもとで、われわれはみなひとつだと歌われるのです。地上の歓喜の聖性が強調され、人間の絆の尊さが説かれることになりました。そして「歓喜の主題」と「抱擁を受けよ」の主題が組み合わせられ、壮大に音楽が展開していきます。《第9》全体のクライマックスといえるでしょう。《第9》でベートーヴェンは何がいたかったのでしょうか。明らかに、人間と人間の繋がりは聖なるものであるということ、そしてそこに人としての最高の喜びがあるということではなかったでしょうか。今回、川越総合高校と尚美学園大学の皆さんのコラボレーションで実現したこの音楽会は、ベートーヴェンが到達した最後の境地からのメッセージにまことにふさわしい機会となりました。「結びつき」の尊さを《第9》で確認しようではありませんか。

宮沢賢治の世界と音楽 解説 坂田 晃一

宮沢賢治の詩の特徴は、ありのままの自然と、生起する心の中の揺らぎのようなものを同時に書き連ねていくことにある。賢治はそれを「心象のスケッチ」と言った。この「雲の信号」も例外ではない。眼前の春たけなわの自然を描きつつ、彼の奥深い心理を象徴的に謳っている。そして、この季節に日本にいないはずのない「雁」が「降りてくる夜」を描いてこの詩を終わらせることで、彼の心象風景を浮かび上がらせている。

法華経への深い信仰の故であろうか、賢治は自らに禁欲を課していたといわれる。しかし、そこにある春は、そのような誓いなど忘れてしまうような魅惑に満ちており、里は春の喜びに溢れ、そこに生きる生き物たちはその春を謳歌している。山はまだろみの表情を見せ、悠久の時を伝え、世俗的な誓いなど、飲み込んでしまう。そして、自らの思いを天空に掲げれば、地上的なことは全て超越してしまう。

その明るい天空から一転し、最後の節では、ほの暗い魅惑的な春宵を思わせ、あたかもなにか授かり物が降りてくることを期待しているかのように感じさせる。

私はこうした解釈のもとに、曲作りにあたった。賢治の詩が常に

そうであるように、この詩も自由な形式で書かれているが、四つのブロックによる起承転結の構造も読み取れる。それらブロックごとにひとつのまとまり(楽段)とし、形式としては詩の運びに即して自由であり、その起伏は詩から読み取れる「心象」の動きからインスパイヤーされている。

やや長い序奏の後、合唱が始まり、各ブロック間には、オーケストラ演奏による表現を挟み込んでいる。これはいわゆる「行間を読む」ことを音楽的に試みた結果である。全体にわたって動機の展開や構築に類することを一切せず、合唱作品にありがちなポリフォニック(多声音楽的)な手法も用いていない。自由な旋律線と、それを支える和声連結による表現に重きを置き、和声は機能的な和声法によらず、完全な終止もしない。

宮沢賢治の詩作品には里山を謳ったものが数多くある。自ら農民と称し、当時の農民の生活向上を目論みもした。また彼は、自らの作品の通底には音楽が流れていると言ひ、西洋音楽をこよなく愛し多数のレコードを所蔵していた。特にベートーベンの主要作品はそのほとんどを所持していたと言われている。更に彼は、ペー

ーヴェンの「第九」に共感して「農民芸術概論綱要」を記した。その主張は九十年近くを経た現在でも色褪せるどころか、衝撃的で新鮮に響く。「おれたちはみな農民であるく中略くもつと明るく生き生きと生活する道を見付けたい」と言ひ、「世界がぜんたい(本文のまま)幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」とも記した。

F運動」の精神的な拠り所ともなり得る。このような巨人の作品を音楽にする機会を得られたことは、私にとって誠に幸甚なことである。最後に「農民芸術概論綱要」から更にその一部を引用してこの拙文を終わることにしたい。

雲の信号

宮沢賢治

あゝいゝな、せいせいするな
風が吹くし
農具はびかぴか光つてゐるし
山はぼんやり
岩頸だつて岩鐘だつて
みんな時間のないころのゆめをみてゐるのだ
そのとき雲の信号は
もう青白い春の
禁慾のそら高く掲げられてゐた
山はぼんやり
きつと四本杉には
今夜は雁もおりてくる

「21世紀の農・食・祭

～いのちを思う～

農業高校支援機構会長
J T生命誌研究館館長 中村 桂子

*本稿は、本年10月28日に川越総合高校で行われた思想劇場「里山芸術と農業の未来」における講演を元に作成したものである。

「文化」の根源―農・食・祭

「生命誌」という、生き物の歴史物語を読み、自然の中の人間について研究をしています。その中で、今日のテーマである「Culture」について考えてみます。

「Culture」を辞書で引くと、まず「文化」、つまり「その土地や社会の人々の生活、風習や考え方の総称」とあります。その中で、一番の基本になるのは「食べる」ということだろうと思うのです。食べない人はいません。それぞれの土地にそれぞれ生産するものがあり、それを食べることで、即ち「食」こそが、その土地の生活の基本であり文化なのです。

第二の意味は「耕作」です。農業が「Agriculture」であることが示すように、「Culture」は本来は、「耕作する・栽培する・飼育する・養殖する」という行動を指します。人間はかつては他の生き物と同じように、自然に在る物を狩猟採取して食べていましたが、一万年位前から、自分たちの食べたい物を皆が豊かに食べられるよう、自ら作って食べることを始めました。「農」

の始まりです。このことによって、人間的な、即ち文化的な生活が始まりました。ですから、文化の根本は「農」であると言っても過言ではありません。

さらに、三番目の意味として「教養」という言葉が出てきます。教養とは、何も難しい書物を読んで知識を獲得することではなく、自分の体の中で本当に「そうだ！」と分かること、即ち「体得」を意味します。そして、体得した結果、新しいものを生み出す、「創造」することだと、辞書に書いてあります。私はさらに、その創造したものを「表現」することが大事であると思っています。言葉での表現もそうですし、身体表現や音楽・芸術、そして「祭」も大切な表現です。

ここ川越近隣には有名な「川越まつり」や「秩父夜祭」がありますが、昔は五穀豊穡を祈願し収穫に感謝してお祭りをするのが当たり前でした。農と食と祭が自然に密接に結びついていたわけです。ところが現代では、それぞれの結びつきが希薄になってしまっています。本来は全てが文化の根源として根

を一にしていたものなのに、お互いを結ぶ線が細くなってしまうと思います。その線を再び太くするために、今、私たちは何をしたらよいか。それを自らに問い直すためにも、農と食と祭をテーマに議論し、音楽祭や芸術祭を通して、その意味を体得することはとても大切なことだと思います。

「機械と火の時代」から 「生命と水の時代」へ

さて、この農と食と祭の結びつきを急速に細くしてしまつた時代が20世紀でした。私は20世紀を「機械と火の時代」と呼んでいます。20世紀、我々人間は、「火」＝エネルギーを大量に使って、大量の製品を合理的効率的に生み出すことに躍起になりました。おかげで生活は便利になりましたが、結果、金融市場原理と科学技術が人間の社会を支配する時代となりました。

その繁栄と発展の一方で、自然が壊されました。それは外の自然、つまり地球環境の破壊と同時に、内なる自然、私たちの体と心も壊れました。いじめや家族の問題など

Profile

1936年東京都出身。東京大学理学部化学科卒業、同大学院生物化学修了(理学博士)。三菱化成生命科学研究所人間・自然研究部長、早稲田大学人間科学部教授、大阪大学連携大学院教授などを歴任し、1993年～2002年3月までJT生命誌研究館副館長。2002年4月より同館館長。主な著書に、『いのちの不思議を考えよう』(朝日新聞出版)、『生きものの上陸大作戦―絶滅と進化の5億年―』(PHPサイエンス・ワールド新書)、『生きているを考える』(NTT出版)、『「子ども力」を信じて、伸ばす』(三笠書房)、『生命誌の世界』(NHKライブラリー、日本放送出版協会)、『生命科学から生命誌へ』(小学館)他、著書・訳書多数。



「つくる」からの脱却

「機械と火の時代」を象徴する「つくる」という言葉について考えてみます。

私たちは「自動車をつくる」と言

などです。経済や科学技術が悪いのではなく、その枠組みの中だけで考えてはいけないと思います。

当たり前のことですが、私たちは、自然の中にあり、生命を持つヒトという生き物です。人間も自然の一部ですから、外の自然を壊す行為は、私たちの持つ自然、即ち、体と心を壊さないはずがありません。大事なものは時間と関係です。時間に追われ、人を含め様々な関係が切れると、心は壊れるのです。

今、環境問題は技術で解決し、心の問題は道徳で解決しようとしていますが、そうではありません。共に生命の問題であり、我々が生命を忘れているから起きていることなので、今一度、「生命」を思わなければいけません。その意味で、21世紀は「生命と水の時代」になるでしょう。

います。設計図と部品を使って組み立て、製造する「つくる」です。ここでは、誰よりも早く大量につくることが求められる、まさに「機械と火の時代」を象徴する「つくる」です。

ところが、私たちはいつの間にか「コメをつくる」とも言うようになりました。でも、お米はつくれません。「イネを育てて」いるのです。イネには生育に必要な時間がある。それを短縮したら、丈夫なイネは育ちません。自分たちが自然を支配して「つくる」という発想で考えるから、農業は生産性が悪いなどという議論が生まれてしまうのです。

さらに困ったことに、「子どもをつくる」とも言ってしまうですね。人間の子どもがつくれるはずがありません。生み育てるものです。「つくる」ものだと考えるから、大人の言うことをよく聞いて、素早く答えを出す子だけが良い子と言われるようになる。それが間違いであることは皆気づいているのですが、残念ながら、今の社会は、子どもをそうやって評価してしまっています。

つながりを考える

どうしたら、そんな「機械と火の時代」を卒業して、生命を思う「生命と水の時代」を実現できるか。哲学的に難しく考察することもできるので、私は、とても簡単なことだと思っています。「生き物がつながっているね」ということが皆の中で分かり、それを基本にいろいろながることが動いていけばよいのです。

そのつながりの第一は、時間的なつながり。昔からもつながっていますし、未来へもつながっています。生きるということは、時間を紡いでいくことであり、効率は無意味です。時間を紡ぐことが生きることなのだと、改めて心に留めてほしいのです。

それから、空間的なつながり。人間同士はもちろん。他の生き物や物とのつながりも、とても大切です。空間は「宇」、時間は「宙」ですから、時間的・空間的な関係を大切にすることが、まさに宇宙的な広がりを考えることになるわけです。

「里山ルネサンスの担い手の皆さんへ」

農業高校支援機構理事長・千葉大学名誉教授 古在 豊樹

Profile

1943年生まれ。千葉大学園芸学部園芸学科卒業。東京大学農学系研究科修了（農学博士）。大阪府立大学助手を経て1990年より千葉大学園芸学部教授。園芸学部長、環境健康フィールド科学センター長を経て2005年より千葉大学学長。現在、名誉教授及び前述のセンターの特命研究員。2010年4月以降、NPO植物工場研究会理事長としての業務を主としている。専門は植物環境工学。日本農業気象学会賞、日本生物環境調節学会賞、日本植物工場学会賞、日本農学賞、紫綬褒章、中国・友誼賞、米国培養生物学会賞など多数受賞。

最近、社会的にも、農業問題、食糧問題等に関心を持つ人々が多くなり、農業をサポートして下さる方々が増えていることを大変喜んでおります。言うまでもなく農業というのは、食料を生産するだけでなく、環境を保全し、多様性を高め、自然との関わりを大切にすることを大変深い関係を持っております。元々、農業は「agriculture」、園芸は「horticulture」と、英語ではどちらも「culture」が付いているように、文化の元、文化をつくり出す根源が農業であったのです。その農業を大事にするということは、文化を大事にするにも通じるわけですね。その文化というのは、自然との共生、自然への働きかけということが大事になっていきます。このことは、単に農村が重要だということではなく、都会の中でも、食料を生産し、花を愛で、虫が来るのを楽しむ。そのような生活が日々取り入れられることが重要な農業」というものも、今後重要性を増してくると思います。

「都市の中の農業」というのは、いわゆる大農法ではなく、小さくは市民農園、家庭園レベルから施設園芸、新しい農業としての植物工場といったものも含まれます。それらの農業が、都市の人々の生活の中に入ってくれば、自然に都市生活者も、農業の大切さや食の大切さ、安全への配慮を感じるようになります。農家の方々や、食料生産や環境保全に携わる人々への理解を深め、ひいては日々の生活やライフスタイルが変わってくるのではないかと思います。

その意味で今後は、街づくり全体に「農」というものを取り入れる、即ち「農」のあるライフスタイルの定着を考慮した街づくりが重要になってくるのではないかと思います。私たちが自身もその点で何かしら貢献したいと思えますし、その基盤を作るのは農業高校の生徒さんや先生方、または、それに関連する方々になりますので、私たちは全国の農業高校の皆さんを心から応援し、仲間の輪を拡げていきたいと思っています。



原案：中村桂子・協力：団まりな・絵：橋本律子・提供：JT生命誌研究館

物謂いは、この上から目線の発想です。本来人間はこの扇の中にある存在なので、地球にやさしく生きていかないといけないと考えする必要があります。日常生活も技術も芸術も、扇の外でつくり出すのではなく、自分たちが扇の中にいること、他の仲間たちと38億年を共有していることの再認識からスタートしたいと思います。

表現することの大切さ。そのような思いから、生命科学から生命誌へと研究の領域を移しました。生命科学は時間を切り、メカニズムを考える学問ですが、生命誌は時間のつながりを考えます。そのつながりの中で「生命」即ち「生きていく」ことを見つめるのが私の研究です。こうした研究をしていて、その大切さに気づくのが「表現する」ということです。「生命」や「生きる」ことを考えることの意味やその大切さを、どのように表現し伝えていったら、多くの人に理解してもらえ社会が変わっていくのか。その働きかけの過程で表現の果たす役割はとても大きいのです。私は数年来、各地の小学生たちの農への関わりに参加しています。例えば、兵庫県の豊岡市のコウノトリの里にある新田小学校では、コウノトリを助けるために作った田んぼで採れたお米を、生産したからには消費しなければならぬと、小学生達が自発的に考え、自らコンビニエンスストアに商談に出かけ、おにぎりに自分たちのお米を使ってくれるようプレゼンテーションをしました。

また、福島県の喜多方市は農業特区になっており、小学校で農業科の授業があります。最初は数校のモデル校でスタートしましたが、現在では全市の小学校で行われています。そこで様々な農作物を育てた体験談や感想文をまとめた作文集があるのですが、どの作文もとても素晴らしい。自然との関わり、地域の人々との関わり、発見や感動に満ちています。このように、子どもたちには、本来「生命」や「生きる」ことへの尽きることはない好奇心と、そこで自分が感じたこと、体得した喜びを、素直に多くの人と分かち合おうとする表現力が備わっています。それが言葉や身体表現であっても、音楽や美術作品であってもよいのです。「生命」を思い「生き物」つながるね」ということを、皆が心と体で共有し合うことができれば、きっと21世紀は真の意味で「生命と水の時代」になるだろうと期待しています。

私は、生き物のこと、そしてつながりのことを考える時に、「生命誌絵巻」(図)を見ます。扇の線が現代であり、バクテリアから人間まで、様々な生き物が描かれています。数千万種と多様です。一方、生き物たちは皆、DNAを持つ細胞でできているという共通性があります。これが偶然とは思えません。祖先は同じ、38億年前の海の中で

生まれただろうと考えられています。それが38億年かけて、これだけの様々な生き物になってきた。ここに、時間と関係が全て入っているわけですね。まさに、「つながり」です。重要なのは、人間もこの中にいる生き物の一つであることです。「機械と火の時代」には、人間がこの扇の外にいと勘違いして、傲慢にも、上から自然を眺めてきました。「地球にやさしく」という

表現することの大切さ。そのような思いから、生命科学から生命誌へと研究の領域を移しました。生命科学は時間を切り、メカニズムを考える学問ですが、生命誌は時間のつながりを考えます。そのつながりの中で「生命」即ち「生きていく」ことを見つめるのが私の研究です。こうした研究をしていて、その大切さに気づくのが「表現する」ということです。「生命」や「生きる」ことを考えることの意味やその大切さを、どのように表現し伝えていったら、多くの人に理解してもらえ社会が変わっていくのか。その働きかけの過程で表現の果たす役割はとても大きいのです。私は数年来、各地の小学生たちの農への関わりに参加しています。例えば、兵庫県の豊岡市のコウノトリの里にある新田小学校では、コウノトリを助けるために作った田んぼで採れたお米を、生産したからには消費しなければならぬと、小学生達が自発的に考え、自らコンビニエンスストアに商談に出かけ、おにぎりに自分たちのお米を使ってくれるようプレゼンテーションをしました。

また、福島県の喜多方市は農業特区になっており、小学校で農業科の授業があります。最初は数校のモデル校でスタートしましたが、現在では全市の小学校で行われています。そこで様々な農作物を育てた体験談や感想文をまとめた作文集があるのですが、どの作文もとても素晴らしい。自然との関わり、地域の人々との関わり、発見や感動に満ちています。このように、子どもたちには、本来「生命」や「生きる」ことへの尽きることはない好奇心と、そこで自分が感じたこと、体得した喜びを、素直に多くの人と分かち合おうとする表現力が備わっています。それが言葉や身体表現であっても、音楽や美術作品であってもよいのです。「生命」を思い「生き物」つながるね」ということを、皆が心と体で共有し合うことができれば、きっと21世紀は真の意味で「生命と水の時代」になるだろうと期待しています。

「美の原点としての景観

～日本の童謡に謳われる里山の風景～

東京農工大学大学院 共生科学技術研究部教授 千賀 裕太郎

*本稿は、本年10月28日に川越総合高校で行われた思想劇場「里山芸術と農業の未来」における講演を元に作成したものである。

景観教育の重要性

このたび、川越の皆さんが、農・食・祭の関わり、とりわけ農業と芸術の関わりについて考えられ、新しい取り組みをなされようとしていることに、農村環境や景観学を研究する者として、大変嬉しく、期待を持って応援しております。

日本の農業高校や大学における農業教育や芸術教育のレベルは大変高いものだと思いますが、さらなる希望として、景色や風景、専門的に言えば「景観」についての教育にもっと注力していただきたいと思えます。なぜなら、おそらく人間が「美」というものを感じる感性が最初に培われたのは、自分の身の回りの風景ではなかったかと思うからです。

美の感性を培ってきた景観

「アフオーダンス」という面白い議論があります。米国の知覚心理学者であるジェームス・ギブソンという人が唱えた概念で、動物は、自然に関わり自然に働きかけることによって、自然がその動物にもたらす様々な機能や役割を知ることができるというものです。このことを最初に発見したのはかのダーウインであり、彼は道具を使う動物の生態観察を通して、動物は自然との関わりの中で知性を育んできたのだと結論づけています。

ですから人間も、自然や土がどれだけのことを人間に与えてくれるのかということも、農業を始め、土を耕しながら学んでいき、知性も発達させてきたのだらうと思えます。そして、自分が土を耕し農業を行う中で、望ましい自然の姿や、期待に叶う作物が育った時の自然の姿を好ましく感じ、いつしかそれを「美しい」と感じるようになったのではないかと。また文学や美術などが十分でない時代の初めの感性が作られたのは、そうした自然との関わりによってではなかったかと私は思っています。

その意味では、農業はまさに、大地をキャンバスにしながら鋤を筆にして芸術作品を作っている。人間にとって好ましい景観を日々描いているのだらうと思うわけです。

景観の三つの健全性

では、人間が好ましく美しく感じる景観はどういうものか。私は、「三つの健全性」というものが、地域の景観の基礎になると考えています。一つ目は、「地域生態系」の健全性です。やはり地域生態系が健全でなければ、人が「あぁいいな」と感じる景観にはなかなかならない。二つ目は「地域文化」です。その地域が育んできた伝統的な文化が、きちっとそこに表現されていることが大切です。そして、「地域社会」。社会的動物として、

ての人間が、地域に対してきちっとした関わりをし、その中で景観に行き届いた手が入っている。これら三つの健全性が、景観を美しく見せるのではないかと思っています。しかしながら、現状の日本においては、必ずしも、この「景観」に対する教育が十分とは言えない。特に、中学から高校にかけては、景観美に対する感性が明らかに、自分の中で自覚できるようになる大切な時期なのではないかと思っています。その時期に景観への気づきを与える教育がなかなかなされていないように思っています。

ヨーロッパで大切にされる「農業(耕)景観」

この点、ヨーロッパでは、農業あるいは農業者は、地域を美しく保ってくれているガーデナー(Gardener:庭師)なのだという認識に立って市民に教育されています。農業の持つ、景観を整え、美しくしてくれる機能というものを、子どもの時代から伝えていきます。だからこそ、景観の保全や景観に対する法制度もしっかりと整備されているわけです。

また、景観のことを、英語で「landscape(ランドスケープ)」、独語では「Landschaft(ラントシャフト)」と言いますが、さらにその頭に「culture」とい言葉が形容詞系で付いた

Profile

1948年北海道生まれ。東京大学農学部卒業、農林省農地局、ドイツ連邦共和国食料農林省・ボン大学(研修)、宇都宮大学農学部、東京農工大学農学部を経て、東京農工大学大学院共生科学技術研究院生存科学拠点教授。国土審議会、食料・農業・農村政策審議会、文化審議会の各専門委員、NHK中央番組審議会委員などを歴任。研究分野は水環境計画、農村地域環境計画、ビオトープ保全と形成手法。著書に「水資源のソフトサイエンス」1989年 鹿島出版会「道と小川のビオトープづくり」1993年 集文社(共監訳)「よみがえれ水辺・里山・田園」(岩波ブックレットNo.364)1995年 岩波書店「地域資源の保全と創造」1995年農文協(共著)など多数。



「cultural landscape」や「Kultur Landschaft(クルトユアラントシヤフト)」という言葉があります。これは、日本語では一般に「文化景観」と訳されていますが、「culture」とは元々耕すという意味ですから、「農業景観」「農耕景観」と捉えた方が的確であるように私は思います。ヨーロッパには本来、こうした「農業(耕)景観」を大切にする風土があり、世界遺産の中にも、「cultural landscape」という部門ができました。その対象となつているのは、棚田の景観やブドウ畑の景観であつたりします。つまり、それだけ、農業(耕)景観が世界遺産的価値を持つものとして国民の間に着しているということ。私は日本でも、こうした概念が国民に広く受け入れられるようにしていきたいと思っています。

『春の小川』に謳われる里山の風景

そんなことを考えている中で、ふとあらためて、日本の童謡に目が留まりました。

例えば、『春の小川』という童謡がありますね。その歌詞を辿っていくと、最初に「春の小川はさらさら行くよ」と謳われます。「さらさら」という流れの音からすると、比較的河床が平らです。とっつと流れている安定した川だということが分かります。次に「岸のすみれやレン

ゲの花に」と出てくる。レンゲの花が咲いているというのは、水田のそばにある川だということです。それを私の研究室の博士課程の女子学生に絵にして貰ったのが下図です。まさに、このような風景が春の小川に謳われているんですね。例えば、絵の右上に描かれている比較的大きな川が多摩川だとすると、そこから横向きになるべくゆっくり流れる、等高線に近いような水路を作ったのが農業用水路です。そこから、川よりも比較的高い所にあつて水が使えるかつた所に水を供給することで水田ができ

わゆる里山の雑木林とその近くにある溜池との情景を正確に描いている。その意味で、童謡には日本人の持つ風景観がきちつと描かれており、それを子ども達が歌っていることは非常に大事なことだと思えます。

しかしながら最近では、こうした童謡さえ知らずに育っている学生も多いようなので、今一度、我々の美の原点としての景観の重要性を見直し、若い人達に伝えていければと思っています。

続いて二番では「エビやメダカや小鮒の群れに」とあります。メダカというのは、極めて小さな魚です。魚には、その魚固有の速度(突進速度と巡航速度)があるので、メダカは小さくて非常に巡航速度が遅い。このため、ゆっくり流れる安定した川や池でないと、なかなか育たないんです。そのメダカがいるということは、非常にゆつくりとした安定した川、即ち、人工河川であることが分かります。このように、『春の小川』というのは、この絵に描かれているような風景を、びつくりするくらい正確に見事に描いていることになりました。この他に「どんぐりころころ」などの童謡もよく調べてみると、い



「春の小川」の風景 作画:乳深真美

「農業高校と伝統文化」

財団法人全国学校農場協会理事長 花野 耕一

Profile

1952年新潟県生まれ。東京農工大学大学院修了後、1978年東京都立農芸高等学校教諭。東京都教育庁指導部主任指導主事、東京都立青梅総合高等学校校長を経て、2009年度より東京都立農芸高等学校長。2010年度より財団法人全国学校農場協会理事長を務める。

はじめに

現在、農業を学ぶことのできる高等学校（農業高校）は、全国に約四百校あります。ここで言う「農業高校」は、次のような三つの種類の学校を含みます。

- ① 農業科の単独校
- ② 農業科と普通科・工業科・商業科・家庭科・総合学科等との併置校
- ③ 農業系列を設置している総合学科高校

農業高校は明治時代に開校した学校が多く、百年以上又は百年近い伝統があり、地域と共に歩んできました。

また、農業高校は地域の農業の担い手や地域を担う人材を育ててきました。そのため、農業高校は地域との関わりが強く、地域の伝統文化にも深く関わってきました。

農業高校と伝統文化

古来より、農は「国の基」と言われ、人々の命を育んできました。

そして、全国各地で、豊作を祝う様々な「祭り」が行われてきました。祭りには、その地域独自の郷土芸能が披露され、祭りを盛り上げます。農業高校は、地域と長く関わる中で、地域から郷土芸能を学び、時には学んだ郷土芸能を地域で発表してきました。

生徒が農業高校で郷土芸能や伝統文化を学ぶ方法は、授業と部活動の二通りがありますが、ここでは、部活動の場合を述べたいと思います。

部活動には、郷土芸能伝承部や伝統文化部のように、郷土芸能、伝統文化を総合的に学ぶ部と、和太鼓部のように特定の種目を学ぶ部があります。

部の活動範囲は校内を主とするものから、地域の行事に参加するものや、県大会や全国大会を目指すものまであります。

また、部活動の技術レベルは、初心者中心の部から、県大会や全国大会で入賞する部まであります。

いずれにせよ、元気な高校生が一生懸命に発表する姿は、見る人に感動や喜びを与え、地域を元気にします。

伝統文化の担い手として

これまで、農業高校は地域の伝統文化を継承し守ってきました。今後、我が国は少子高齢化が進み、伝統文化の担い手が不足していくと思います。

そこで、地域と共に歩んできた農業高校は、地域の宝である伝統文化の担い手を積極的に育て、地域の伝統文化を継承していきたいと思えます。そのことにより、農業高校は新たに地域に貢献することができ、地域にとつてなくてはならない学校になると思います。

「里山讃歌音楽祭に向けて」

NPO法人子ども大学かわごえ理事長 酒井 一郎

profile

1936年大阪生まれ。早稲田大学院商学研究科卒（商学修士）。極東貿易(株)、Far East Mercantile GmbH（ドイツ・デュッセルドルフ）、ボッシュ(株)を経て、神奈川県経済学部非常勤講師、福岡国際大学国際コミュニケーション学部教授、田園調布学園大学人間福祉学部教授を務める。現在、NPO 法人子ども大学かわごえ理事長、早稲田大学産業経営研究所特別研究員。商社マンや大学教授として海外の教育事情にも詳しい氏は、ドイツの「ミニ・ミュンヘン」や「子ども大学」の取り組みに啓発され、大学退職後に、地元川越の自宅に「酒井キャリア教育研究所」を開設。2008年には、近隣の大学と連携し「子ども大学かわごえ」を設立（2009年～本格開講）。同校の活動は大きな反響を呼び、2010年には、同校をモデルとして、埼玉県教育委員会が県下6ヶ所に「子ども大学〇〇」を開設した他、全国各地でも子ども大学が続々と誕生している。著書に『地域で遊んで学ぶ、キャリア教育』国土社、他。

子ども大学かわごえは、二〇〇九年に尚美学園大学、東京国際大学、東洋大学の先生方のご協力により誕生したわが国初の子ども大学です。この子ども大学では、川越市を中心とする地域の小学生（四〜六年生）を対象に、大学の教室で大学レベルの教育を行っています。今年の七月七日に川越市市制90周年記念事業の一環として、子ども大学かわごえ公開講座を尚美学園大学オーデトリウムで実施しました。その時に『音楽の不思議』の授業で、同校芸術情報学部の後藤文夫教授が、学生たちと一緒に木管楽器と金管楽器を鳴らしながら、「なぜ楽器で気持ちが伝わるの？」を見事に表現し、次いで山崎岩男教授のアレンジでソプラノ大隅智佳子歌手とバリトン久保和範歌手がオペラ「フィガロの結婚」と「魔笛」のアリアを歌いました。その朗々たる声量にみんなは圧倒され、オペラへの関心がかき立てられました。

子ども大学かわごえの教育三本柱は、「はてな学」という知性教育、「生き方学」や「ふるさと学」という感性教育から成り立っています。この「生き方学」や「ふるさと学」では、教室で先生の話を聞くだけでなく、実際に身体を動かして五感を働かせる能動的学習を重視しています。

「生き方学」では、体験学習として川越市と協働の「ミニかわごえ」こどものまちプロジェクトを毎年三月に開催して、川越市の子どもや大人と一緒に川越市内の蓮馨寺の境内で

ミニまちづくりを行っています。この催しは、まちの中で子どもが遊びをベースとして働いたり、お金を稼いだりする社会体験型のお祭りです。この「ミニかわごえ」は川越市内の学校、企業、商店、市民団体に参加していただいで実施するへまちおこしの催しでもあります。ところで、日本各地にはシニアを対象とする成人大学が沢山ありますが、これらは自治体が学生募集から授業の運営まで全部の面倒をみる公立の教育機関です。しかし、NPO法人子ども大学かわごえは、市民がつくって自主的に運営をしているへ市民立大学で「地域の落とし子」です。このため私たちは、ふるさと川越に密着した地域活動「ふるさと学」を実践する立場にあります。

この度、尚美学園大学と県立川越総合高校が連携して、農(Farm)、食(Food)、祭(Fest)の小江戸川越地域ブランドづくりに努めておられることを知りました。私たちもこの事業に協力することになり、その協力の一環として「里山讃歌音楽祭KAWAGOE2012」を後援することになりました。そしてこの音楽祭を「ふるさと学」の正規授業と位置づけて、学生と父兄全員が参加することになりました。

「音楽を精魂の糧に」

尚美学園大学副学長・芸術情報学部長 皆川 弘至



Profile

日本大学芸術学部卒業、大手出版社編集長、編集部長、制作担当常務、レコード会社社長等を歴任。音楽ジャーナリストを経て、日本を代表する音楽プロデューサーとして国内外で活躍。クラシック、ポップス、童謡、抒情歌、文学作品ドラマ録音から、雑誌編集、楽譜・単行本出版、音楽映画演出、オペラ演出と幅広く活動。著書多数。東京音楽ペンクラブ、ミュージック・ペンクラブ等会員。東海大学、大阪音楽大学、くらしき作陽大学等を歴任。現在、尚美学園大学・理事・副学長・芸術情報学部長・大学院芸術情報研究科教授。音楽評論家。

目を凝らしてよく見ると、一時代前のウォークマンを大切に握り締めている。『この人はきつと何か訳があつてホームレスになつたに違いない』と思えた。「音楽がお好きなんですね」と問うと「そうですね」と答え、私にイヤホーンを手渡そうとする。「いや、急ぐものから」と断つたが、「急ぐ人が散歩？」と半ば強引に持たされてしまった。仕方なく耳に差し込んでみた。その異相の老人がスイッチを入れると、聞こえてきた音楽は何とフォール「レクイエム」のソプラノ独唱(Pie Jesu(慈しみ深いイエスよ))ではないか。「この声は本当に綺麗だ。天使の歌だ」と私に語りかけてくる。そして「俺は(楽園にて)を聴きながら死んでいきたいんだ」とも言うのだ。私も物心ついてから同じことを考えていたので妙な親近感を感じた。

『この老人は一体何者?』という疑問と、その様異なる風情と言葉に、興味が渦巻き始めた私が音楽関係者とは知る由もない彼は、レクイエムとは何か、この演奏がいかに素晴らしいかを、老人特有の偏狭的な気まじめさで訥々と語り始めたのだ。

インタビューに答えた記事の一部をご紹介しておきたい。そこで氏は「農業の農の字には、曲という字がある」「音楽はアカデミックな教育機関で生まれたわけではなく、日常生活の働きの中から生まれてきた。だから農業の農には曲がある」「芸術の芸は草かんむり。芸術の原点はそこにあるのだ」と語り、そして「生活の中に音楽はあり、心を豊かにするために音楽・芸術があるわけ、技術を競うわけではない」とも述べておられた。

歌の発生源は労働歌だと言われているが、音楽そのものの起源はいつ、何からだったのか? リズムは人間の歩行から、音の強弱は人の会話から、そして音の種類は離れた所へ合図を送る手段から始まったとも考えられている。この種の論文や書籍は数多いが、拙著「わが音楽巡礼」に記したことをここで触れてみたい。その書で小生は、音楽の起源は人間世界だけでなく、むしろ自然界にあるのではないだろうかと述べたのである。あてどのない彷徨だとそしりを免れないかも知れないが、庭でさえずる小鳥に、解を求める一縷の糸を繋いでみたのだ。要約すると、小鳥のさえずりが、食べ物を欲しているのか、愛を求めているのか、また、言い争っているのか、答えが得られる筈もない。しかし、ひよつとしたら、欲するものは何もなく、ただひたすらに鳴いている瞬間があるのではないか、いや歌っているのではないか、と考えたのだ。つまり目的意識がないところで歌っている。芸術の持つ純粋性、心に芸術を宿すことの原点をここに見るのである。

さて最近、雑誌「ストリングス」で株式会社パソナの南部社長がインタビューに答えた記事の一部をご紹介しておきたい。そこで氏は「農業の農の字には、曲という字がある」「音楽はアカデミックな教育機関で生まれたわけではなく、日常生活の働きの中から生まれてきた。だから農業の農には曲がある」「芸術の芸は草かんむり。芸術の原点はそこにあるのだ」と語り、そして「生活の中に音楽はあり、心を豊かにするために音楽・芸術があるわけ、技術を競うわけではない」とも述べておられた。

まさに、同感である。音楽を、芸術を心に宿すことこそ、心豊かな人生を歩む上で必須だということに他ならない。ミレーの名画「晩鐘」「落穂拾い」の農夫の聖母子像のような美しさから受ける感動は、決してミレーの筆致の巧みさからだけではないのだ。

「里山芸術祭への夢」

尚美学園大学 尚美総合芸術センター 研究主幹 乳井 瑞代

高まる「食」「農」への関心

昨年の東日本大震災を一層の契機として、20世紀型社会のパラダイムが大きな転換を迫られていることは、今さら申し上げるまでもありません。

その中で、自然と調和し、安心で安全な生活を送りたいと願う生活者ニーズはますます増大し、とりわけ、「食」や「農」に関心を寄せる生活者が増えていることは、私自身、消費者行動を研究する者の一人として、また、一児の子を持つ母として強く実感しているところです。

週末のオフィス街の広場では、各地の産直野菜を集めた「マルシェ」が賑わいを見せ、都心の高級住宅街には農園付きのシェアハウスが出現し、若者達が共同生活を送る。駅ビルの屋上の菜園を借りて、通勤帰りの有職女性達が自分の作物を育てる等々…。農業の専門家の皆様からすれば、一過性の疑似体験に過ぎないのかもしれませんが、確実に今、人々の関心は「農」へと向かい始め、「農」に関わることで、これからの生き方や心の糧を模索し始めています。

日本人の心のふるさと里山

こうした中で、とりわけ人々の関心を集めているのが「里山」です。人々の暮らしや農と自然が共生する里山は、今日では英語でも「SATOYAMA」と表記されるほど、21世紀の循環型社会を考えるモデルとして、世界中から注目を集めています。

ところが、私は大学で川越の地域活性化を考える授業を担当していますが、その授業の受講生に「里山って知っています？」と問いかけても、最初は誰もピンと来ず、関心も示しません。

しかしながら、そんな彼らに、狭山丘陵こそが、あの「トトロ」の舞台となった森であることを告げると、餓然、懐かしそうに興味深そうに、「知ってる知ってる」と、目を輝かせて頷きます。実際に、里山での散策体験や生活体験を持たない彼らにとっても、不思議なことに、里山は心の故郷になつていっているのです。そして、その狭山丘陵をはじめとした里山が、今も川越の近隣に豊かに残っていることを誇らしく感じ、自分も里山を訪れたい、そこで何かできることはないかと関わりを求め始めます。それだけ里山は日本人の遺伝子に組み込まれた

情景であり、心の依り所なのだと いえましょう。

里山に息づく「大地の芸術祭」

さて、そんな里山を舞台とした「祭」の先行事例があります。それは、新潟県妻有地区で三年に一度開催される「越後妻有トリエンナーレ・大地の芸術祭」(注)という祭典です。

新潟県下でもとりわけ雪深いこの山間地帯は、かつては全国各地の農村同様、過疎化と高齢化に悩む山村でした。そこに、「人間は自然に内包される」というコンセプトの下、世界中から多くのアーティストが集い、里山の自然に触発されながら作品を創作し、その作品を鑑賞するために、都会からも海外からも老若男女が続々と訪れ、里山を周遊するようになった。

初めは、田舎の集落にはいささか不似合いだったこの催しも、回を重ねる毎に確実に地元根付き、今では世界中から50万人もの人が訪れる世界有数の芸術祭へと発展しました。

その発展を支えたのが、市民の力によって運営されているサポート組織の数々です。サポート組織

の中には、芸術祭の会期中だけツアーガイドや宿泊施設等のスタッフとしてお手伝いをするボランティアから、棚田のオーナーになったり、会期後も、田植えや稲刈り、雪掻きを手伝うなど、地域住民を継続的に支援していく組織まで、関わり方の程度に応じた、実に幅広い支援メニューが用意されています。勿論、自治体や民間企業からの助成や協賛金も寄せられますが、主体はあくまで市民の力。それ故、地域住民にも歓迎され待ち望まれる継続的な芸術祭として、地元に着しているのです。

まさに、自然と芸術、そして、市民の力の融合によって、地域の活性化を果たした好例が「大地の芸術祭」であり、現在では、この芸術祭をモデルとして、芸術を核とした地域活性化の取り組みが各地に波及しています。

「里山芸術祭」への夢

このような心強い成功事例に勇気づけられながら、今私は、ここ川越でも、皆様と共に、里山を舞台に、また、里山を共通のテーマとした「祭」を生み育てていくことができ

ないかと考えています。

先例のように大規模なものだけでなくともよいのです。今日ここに高校生と大学生が一緒に音楽を奏できるように、市民が市民の小さな力を持ち寄って、共創していくことが大切です。

また、何も、いわゆるアート(美術)ばかりが芸術ではありません。音楽やスポーツを含む身体表現、写真や映像、俳句や詩作や文学等々、そして、人間が自然と一体となつて創出した農作物や食べ物も、広い意味では豊かな表現作品です。

それらを里山を紐帯として、持ち寄り、束ね、繋いでいくことで、川越やその近隣の里山に、人々が集い、未来につながる活力を培う。そんな「祭」を催すことができたなら、今はまだ一人の他愛のない妄想に過ぎませんが、夢見ています。

そして、その「祭」は、企画や運営者サイドの独りよがりのものでなく、これからの家族のためのものでなければならぬと、一市民、一母親として強く思います。その意味では非「農(Farm)」「食(Food)」「祭(Festa)」の3つのFに、主体としての「家族(Family)」も加え

注) 越後妻有トリエンナーレ「大地の芸術祭」

2000年から3年に1度、新潟県妻有地区(十日町市と津南町にまたがる地域)で開催されている世界最大規模の国際芸術祭。本年夏(7/29-9/17)には第5回目が開かれ、会期中は、人口わずか約7万人の地域に約50万人もの世界中のアートファンが訪れた。アートを核とした独特の地域づくりの手法は「妻有方式」とも呼ばれ、日本国内だけでなく世界中の関心を集めている。

「NPO法人越後妻有里山協働機構」を中核として、ボランティア組織「こへび隊」や「妻有ファンクラブ」「まつだい棚田バンク」等々、関わり方の程度に応じた幅広い支援組織が配された運営体制は、これからの市民参加型の地域プロジェクトのあり方を考える上でも大いに参考となる。詳しくは「大地の芸術祭」公式サイトを参照のこと。

里山讃歌音楽祭に参加して

指導者・出演者からのメッセージ

埼玉県立川越総合高等学校

音楽教諭 増山 真佐子

川越総合高校に赴任して九年、本校は農業を土台に据えた総合学科です。この里山讃歌音楽祭が企画されるもつと前から、農業と芸術について教え導かれていました。

「智を耕して徳を敷く、という言葉の『智』は『地』だと思っている。」そうお話し下さる森田恒夫先生、農場でご指導下さるのは本校吉澤修農場長、尚美学園大学との高大連携を決定された竹本政弘先生、お陰様で大学の先生方や学生の皆様、気がつくとき多くの方に助けられ育てられ本日を迎えることができました。

尚美学園大学松田学長自らの講義を受け、第九の合唱、お世話になった坂田晃一先生の作品と一緒に演奏させて頂くというこの上ない喜びと幸せに感謝の気持ちでいっぱいです。

尚美学園大学 芸術情報学部

主任教授 後藤 文夫

今年度、川越総合高校の田植え、稲刈りに参加した際、ふと幼い頃の記憶が甦った。

私の故郷は山形で、母の実家は農業を営んでいた。子供の頃は幾度となく、田植えや稲刈り、桃や里芋、南瓜などの収穫作業を手伝った懐かしい原風景を、川越の地でも感じる事が出来た。

一歳の時に実家の祖父は亡くなったから記憶にないが、農業の傍ら尺八を嗜んでいて、人に教える程の腕前だった。もしかしたら、私が音楽家であるのは、祖父の隔世遺伝かもしれない。

玄人素人に拘らず芸術はいたるところに在り、ギリシャ時代から人間を成長させていくための主要4科目のひとつに音楽があった。

Viva! Music!

尚美学園大学 芸術情報学部

合唱サークル「新・音楽集団 匠」指導 教授 山崎 岩男

現在「新・音楽集団 匠」では、来年3月14日の定期演奏会に向けてメンデルスゾーンの「野外で歌う6つの歌」を練習しています。

ドイツ人の森との精神的な結びつきの深さを、それぞれの曲の詩と音楽から感じ噛みしめつつ歌っておりますが、人が音楽を通して自然と対話する姿は、これからの時代に私たちが再発見するであろう生き方を想起させるものだと強く感じております。

今回の「里山讃歌音楽祭」で私たちは、本学坂田晃一教授作曲の「雲の信号」の宮沢賢治の世界に心酔し、またベートーヴェンの第九「歓喜の歌」の合唱を通して、人類のみならず大自然との抱擁を思わせる壮大な音楽を、川越総合高校の皆様とご一緒に味わいたいと思っております。

どうぞお越しの皆様も、心の中でご唱和くださいますよう。

埼玉県立川越総合高等学校

第二学年 吹奏楽学部チューバ担当

新井 和峰

芸術と農業を組み合わせた取り組みがだんだんと広がり、全国色々な所で行われているようです。

私は吹奏楽部でチューバを吹いています。将来は家の農業を継ぎたいと思っていますので、この取り組みには積極的に参加したいと思っています。

川越と尚美学園大学との高大連携により、芸術と農業のコラボが実現し、公演に参加することができました。また、大学生と田植えや稲刈りした体験は本当に楽しい思い出です。

私は、この取り組みが始められた農場協会の森田先生の「音楽は心を耕す」という名言に心を打たれました。この言葉は、まさに芸術と農業がつながっていることを表していると思います。私たち吹奏楽部も芸術と農業を大切にしていきたいと思っています。

尚美学園大学 芸術情報学部

尚美学園大学管弦楽団 代表

奥村 香織

この度は、「里山讃歌音楽祭」に参加させていただき、誠にありがとうございます。

本日私たちのオーケストラが演奏いたしますプログラムは、それぞれの作曲家が想う「里山」を表現した作品が中心となっています。

作曲家が描いた里山は、いわば子供時代からずっと変わらず心に残り続けている「ふるさと」とも呼べる原風景だと思います。それは世界中、今も昔も変わらず誰もが持っている、自分の原点といえる場所なのではないでしょうか。そして奏者は自らの心にもある原風景を、その作品に投影して演奏をするのです。

皆様にはその作曲家、そして奏者各々が込めた「ふるさと」への想いを少しでも感じていただけたら幸いです。

それでは、最後までどうぞごゆっくりお聴きください。

尚美学園大学 芸術情報学部

合唱サークル「新・音楽集団 匠」

石川 和樹

ある日いつもの大学生活の中で、教職と一緒に取っている他コースの同級生から稲刈りに誘われました。急遽誘われたことと服装も割とラフだったので少し動揺しましたが、参加することにしました。参加した他の人は小学生や中学生の時に一度体験したことがあるみたいでしたが、私は今回が初めての稲刈りでした。長靴に履き替えて、稲の生えている田の中に足を踏み入れて鎌でサクサクと刈り、稲が片手いっぱいになったら紐で結わう作業を続けました。

今回は一時間程度の作業でほんの一角だけを稲刈りしましたが、これを敷地内すべてするというのはとても大変なことだと感じました。普段、都会の中で生活していて稲刈りという作業自体にめぐり合いもしませんが、実際にやってみるだけで最終的には米粒ひとつでも勿体ないと感じながらみんな取り残しのないように必死になっていました。私にとって今回の稲刈りはとても貴重な体験でしたが、こうした農作業に少しでも触れて普段私たちが口にしていくものがどうやってできているのか、どれほど苦勞なのか知ることには大切だと感じました。



Profile

1971年、神奈川県生まれ。東京芸術大学大学院（デザイン専攻）修了後、主に木版画の技法を用いて、駅や街並をテーマにした作品を発表。地下鉄出口風景をまとめた版画本「地下鉄出口帖」、小湊鉄道の全駅をポストカードと版画本にした「小湊鉄道駅日和」（いずれも私家版）を制作。四ツ谷駅全景を作品にした版画「四ツ谷駅」（2011年までJR四ツ谷駅構内展示）や絵本「でんしゃにのったよ」（福音館書店）がある。近作は「宮澤章二詩集カレンダー2013」（学研）の絵を担当。



主催：尚美学園大学・埼玉県立川越総合高等学校

共催：農業高校支援機構・財団法人全国農場協会・NPO法人子ども大学かわごえ

協力：川越市・埼玉県教育委員会・JAいるま野・西武鉄道株式会社

NPO法人武蔵野の未来を創る会・一般財団法人森永エンゼル財団

柏の葉アーバンデザインセンター（東京大学、千葉大学、柏市、三井不動産による公・民・学の協議会）

【演奏スタッフ】

指揮：河合 尚市

指揮・作曲：坂田 晃一

合唱指揮：仁階堂 孝

合唱指導：山崎 岩男・増山 真佐子（川越総合高等学校）・小林 範子（子ども大学かわごえ客員教授）

合唱ドイツ語指導：細川 正昭（元東京電機大学教授）

坂田晃一助手・パート譜作成：大野 理津・苗加 琢人
（共に、作編曲家・尚美学園大学卒業生）

【企画・運営スタッフ】

実行委員長：皆川 弘至

企画：尚美総合芸術センター

表紙デザイン・版画提供：岡本 雄司

記念誌企画・編集：乳井 瑞代

記録：漢那 拓也

制作：尚美学園大学

*所属の特記のない者は、全て尚美学園大学

「里山讃歌音楽祭 KAWAGOE2012」記念誌

発行日：2012年12月17日

編集人：乳井 瑞代

編集企画：尚美総合芸術センター

発行所：尚美学園大学

350-1110 埼玉県川越市豊田町1-1-1

印刷：マックススピードプリント

142-0062 東京都品川区小山4-16-3-101

出演者一覧

指揮：河合 尚市／指揮・作曲：坂田 晃一

「第九」ソリスト：丸山 恵美子(ソプラノ)・奥野 恵子(アルト)・朝倉 佑太(テノール)・久保 和範(バリトン)

合唱指揮：仁階堂 孝／合唱指導：山崎 岩男・増山 真佐子

尚美学園大学管弦楽団

フルート 高橋 有紀・鈴木 杏里・奥村 香織
オーボエ 神島 竜司・今井 薫
クラリネット 鈴木 雄大・駒田 志保
ファゴット 小林 信子・湯本 真知子・後藤 芙樹
ホルン 勝田 朋成・曾根田 美稀・近江 梨沙・遠藤 美緒
トランペット 具志堅 創・蔵元 悠貴
トロンボーン 三添 杏奈・今井 麻美・三浦 紗都美
チューバ 野上 貴史
ティンパニ 佐々木 良寛
打楽器 吉岡 理菜・田中 ちひろ・牧野 美沙
ハープ 高野 麗音
チェレスタ 吉澤 沙也加*

第1バイオリン 海保 あけみ・岡田 文子・神野 桂子・白石 夏子・徳井 えま
伊藤 真貴・荒井 友美・村田 早苗・諸岡 真保・渡来 さやか
第2バイオリン 片桐 恵里・河合 真理・山口 嘉奈子・袴田 朋美
杉山 優子・小林 清美・塩野入 清美・佐竹 朋実
ヴィオラ 松井 啓子・太田 史子・倉嶋 能子
坂口 昂平・安達 いづみ・塩路 まもる
チェロ 石川 智美・齋藤 章一・畑江 寿利
伊藤 恵以子・河村 治・安東 和美
コントラバス 宮部 宏美・西村 良子・田沢 烈・菊池 藍

合唱団

【埼玉県立川越総合高等学校】

ソプラノ

曾田 花穂・手塚 咲良・三上 紗希・金子 結・林 美佳・内野 陽香・蓮田 佑季・伊藤 愛莉・脇 真優美・河野 快

アルト

浅岡 夕稀・門田 麗奈・長谷川 舞・初鹿 みどり・半田 靖乃・真島 啓子・伊藤 光海・諏訪部 美咲・星野 留奈・越田 恵美
佐伯 香純・関谷 萌瑠・大橋 紗恵・加藤 彩花・佐久間 青空・中里 笑歩・星 桃花・須藤 彩・萬 紗和・大越 千春・牧 夕莉子

バス

山本 達哉・新井 和峰・鈴木 信勝・植田 裕太

【尚美学園大学】

ソプラノ

新井 里美*・伊藤 ありみ*・大坪 希*・小澤 貴美*・中山 真利絵*・前川原 怜子*・上原 志織
菅原 有・大石 瑠璃・深野 公与・阿部 仁美・佐久間 ちひろ・大坪 希・井山 愛梨・高根澤 貴絵・福島 早織
伊藤 咲希・川込 真琳・見留 夕紀・山口 芽生・佐藤 綾美・佐々木 朋美・安達 彩夏・藤田 美十夢・玉護 文乃
青木 麻菜美・高野 愛子・原山 稀帆・猪又 莉香・小森 亜紀・高野 明日香・田原 麻衣子・岳 暁雲・宇賀神 礼・藪 絵里菜

アルト

岡村 愛梨*・小出 有紗*・藤崎 明香*・武藤 愛*・吉澤 沙也加*・工藤 紗央理・近江 美美香・李 蓮盛・小美野 綾菜
藤崎 明香・佐藤 綾美・尹 恩榮・小西 瑛美・尾花 葵衣・崎田 彩加・上野 麻衣・柿崎 愛・松下 祐梨・村上 綾
横田 里菜・原沢 夏織・佐々木 ひかる・加茂 未亜

テノール

朝倉 佑太*・浅野 綱太*・石川 和樹*・棚村 力也・星野 高大・飯坂 良樹・小田倉 翔・山下 貴徳・村田 傑・近藤 良祐
三浦 秀夫・工藤 拓也・石井 尚文・佐藤 俊也・秋田 将之・石橋 湧・清水 星

バリトン

細田 征吾・西 隆之介・浅野 綱太・丸山 晃佑・三森 智啓・三村 隆史・松木 悠人・深澤 優哉・宮本 哲也
阿久津 達也・生井 匡

バス

海下 智昭*・清水 裕生*・丸山 晃佑*・三浦 秀夫*・宮沢 稜*

*「新・音楽集団 匠」所属

パンフレット記載事項の訂正と追加

《訂 正》

*以下の箇所に誤りがございました。お詫びして訂正致します。

- p.8 1段目最終行 イイリゲンシュタット → ハイリゲンシュタット
- p.9 2段目後ろから4～5行目（下線部が欠落しておりました）
西洋音楽をこよなく愛し、多数のレコードを所蔵していた。特にベートーベンの主要作品はそのほとんどを所有していたと思われる。
- p.14 執筆者名下の注記2行目 基調講演 → 講演
- p.23 中段の執筆者名 奥野香織 → 奥村香織

《追 加》

*以下の関係者氏名を追加で列記致します。

p.25 奥付【演奏スタッフ】欄に追加

合唱指導：小林 範子（子ども大学かわごえ客員教授）

合唱ドイツ語指導：細川 正昭（元東京電機大学教授）

坂田晃一助手・パート譜作成：大野 理津・苗加 琢人

（共に、作編曲家・尚美学園大学卒業生）